
夏の夕べ

榎本自転車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の夕べ

【Nコード】

N5351V

【作者名】

榎本自転車

【あらすじ】

「空ってなんでこうもひろいのかね」

双子の兄弟は稽古を抜け出して、
近所の土手に寝転がり空を眺めていた。

『さくらつた』番外編。

2006年に「沖鈴花」名義で書いた作品を推敲した作品です。
以前の版はブログに掲載しています。（重複投稿の作品です）

携帯での表示について

試行錯誤しています。長文が多いため、読みにくい点があると思いますが、ご了承くださいませ。

厳しい暑気もやわらぐ時刻になっていた。

日中にはべったりとまとわりついてきた湿気は、気づけば吹き始めていた心地のよい微風に、いずこかへと流されてしまっていた。

通常ならば町の通りは寂しくなる時間であつたが、往来を往く人々はみな、どこか浮き足立ってにぎやかな声が満ちている。土手に沿って並んだ出店には、こどものみならず、かざぐるまや飴細工を求める大店の店主の姿もあつた。

そんな中、紺の稽古着に身を包んだ双子の兄弟は、土手の草の上に寝転び、段段と沈殿してゆく空を仰いでいた。兄を太一、弟を裕次と言つた。双子といつてもこの二人、姿形はそっくりでも性格はまるきり正反対。兄は頑固で一直線、弟は温厚で思慮深い。言うなれば兄が動、弟は静である。

「なあ、裕次」

「なに、太一」

気だるい太一の声が、幽かに通る生温かい風と共に、傍らの草花をくすぐつた。

すぐ上の往来では、いつもよりどこかおめかしをした人々が行き交い賑わっている。紅を差し着飾つた町の娘たちは、楽しげに談笑しながら歩いていった。

かんざしー や、さかなー などの商人の威勢のいい声や、風鈴の涼しい音色に賑やかなちんどんが町を一層活気付けた。

「俺たち、何でこんなところにいんだろ」
相変わらず太一は空の一点を見つめたままである。その眸には力がなく、ただ空の上澄を映している。

近くの木で、ヒグラシが鳴き始めた。

「さあねえ……。勝之兄さんにこてんぱんに伸されて、道場を飛び

出てきたからじゃなかったっけ」

「おう、上等だぜ」

何が上等なのかはわからないが裕次は、兄が自分自身の大胆な行動に満足しているのだろうと了解した。

目の前を、しじみ蝶がちらちらと横切った。これからねぐらへ帰るのだろうか。

「なあ、裕次。なんで空は悠い^{ひろ}のかね」

「さあねえ……。きつと海なんだよ。海だから悠いのさ」

答えた裕次は口端を緩ませた。

空のてっぺんは、昼間の薄藍^{うすあい}から澄んだ濃藍^{こいあい}の濃淡へと移り変わり、追いやられるように空の下の方では、赤やだいたい^{だいたい}が、混じり合うとも合わないともつかない、沈殿の層をつくり出している。

遠くのほうにひろがる薄雲は、妖艶に輝く韓紅^{からくれなゐ}だ。

西の山の端に陽はほとんど隠れて、さいごの光を放っている。

「海？ だったら水が落ちてくるだろう」

「雨がおちてくるじゃないか」

「じゃあ海に星はあるか」

「うーん……。きつと貝が泡ふいているんだよ」

紺だまりの深いところに、一番星がちかちかしている。

隣で太一がにやり、とするのを目の端に捉えた。

「甘いな、裕次。空が悠いのは巨人が住んでるからに決まってる！」
妙に自信滿滿に言い切ると、太一は目を輝かせた。

裕次は神妙な面持ちで隣の兄を見た後、思わず嘖き出してしまう。
太一はそこで初めて空から目を離れた。

「なんだよ」

「なんだよって……巨人？ 空に巨人が住んでいるの？ あははは
……太一はおもしろい」

裕次は腹に手を当て笑いだすと、太一は眉間に縦じわを寄せた。

「巨人が住んでいるんだったら、なんで落ちてこないのさ」

「ああん？ 俺らが見てるのは巨人の住んでる世界の床だからに決

まってるじゃねえか」

「じゃあ雨はなんで降るのさ」

「そりゃ巨人が暴れてるのさ」

その返答に裕次は体を曲げ、目尻から涙をこぼした。答えた本人は至って真面目であるからたまらない。

「だったら雷は巨人が怒っているから？」

「夏は巨人がはっちゃけてるから暑い」

「何それ。もうおかしすぎるよ、太一……ああ、苦しい」

裕次の笑いはおさまらず、体をねじってしまう始末だ。太一はそんな弟の、エビのような姿に笑う。大きな太陽はとうに山へ帰り、空の紺が残滓を飲み込もうとしていた。天河が流れ、織女星と牽牛星が互いを河の兩岸で呼び合っている。

「……ほら、もうあんなに星が出ているよ」弟の視線に気づかない太一は、もう少ししたら、みんなも来るだろうよ。と楽しそうに笑っていた。

と、不意に風を裂く笛の音が響いた。

「お、始まったか」

太一は体を起こす。

夜空に満開の花が、気持ちのいい破裂音を率いて咲き誇る。

赤、緑、黄色に白。途切れることなく夜空を照らす向こうで、兄弟を呼ぶ声。見れば数名のでこぼこの陰が、手を振りながら土手を下って来るところだった。

「もしかして、今夜花火大会だから稽古を抜け出したの？ ……巨

人も見ているのかな、花火」

「へへっ。うるせえや」

花火が上がるたびに、四方から歓声も上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5351v/>

夏の夕べ

2011年11月16日06時54分発行